



2



1



4



3

HP・SNSで情報発信中!



5

- 1 吉野梨の生育状況を確認する美香さん。早い品種では7月中旬頃から収穫が始まる。(写真は幸水)
- 2 氷川町は県内の梨栽培発祥の地といわれており、100年以上の歴史を誇る。(写真は新高)
- 3 就農時から栽培しているナス。多い時は、1日にコンテナ25杯分収穫する。
- 4 新鮮なナスは甘みが違うという。焼きナスや煮浸しなどにしても美味。
- 5 孝義さんの両親は平成25年の新嘗祭の献穀品を奉納。農業をするきっかけとなった。

住人十彩

2020 August
#4 ~木野孝義さん・美香さん~



このコーナーでは、地域の頑張っている人や団体を紹介します。
今回は、農業経営者の木野孝義さん・美香さん(迫)です。



農業への思い

木野孝義さん(37)・美香さん(38)は、中学2年、小学5年、小学2年生の子どもと両親・祖母と暮らす8人家族。梨、水稲、柿、露地ナスなど、合計約350アールの農作物を生産・経営している。孝義さんは、子どものころから農業に興味を持ち、将来は後継ぎをしないと考えていたが、天候などの自然環境に左右される農業の難しさ・厳しさを知る両親から農業以外の進路を勧められ、高校卒業後は農業をあきらめ、熊本デザイン専門学校に進学し、その後、広告代理店に就職した。しかし、その後も農業をしたいという思いは消えることなく、孝義さんが31歳の時に半ば強引に就農した。両親が新嘗祭(天皇陛下が米と粟を神様に献穀する祭り)で献穀品を奉納したことに感化されたことも理由の1つだという。また、訪問看護の仕事の傍ら、孝義さんの手伝いをしていた美香さんも、令和元年から農業に専念し、夫婦二人三脚で日々汗を流している。

食べる人が喜ぶものを

「お客さんが、自分たちが作ったものを食べて、『おいしい。』と言ってもらえた時がいちばん嬉しいですね。」と話す2人。

そのために、作物が元気に成長できる環境(土)づくりや、必要最小限の農薬使用にするなど、さまざまな工夫をしている。また、きのみ農園では、「生産者の顔が見える農業」を目指し、SNSなどで情報発信している。ネット販売だけでは業務的なやりとりしかできないが、SNSでは気軽にコミュニケーションがとれるためだ。さらに、農業をより身近に感じ、新鮮な作物が格別においしいことを知ってもらうために、収穫体験を始めるなど、新しい視点での農業経営を実践している。「就農してこれまで色々経験してきたが、これからも新しいことに挑戦し、『きのみ農園』を育てていきたいです。」と語る孝義さん。

お客さんの「おっっっ。」という声を聞くために、2人の挑戦は続く。

募集

このコーナーでは、地域の頑張っている人や団体を募集しています。自薦・他薦は問いません。詳しくは、お問い合わせください。

申込先：企画財政課 企画係
☎0965-52-5850

メール：
kouhou@hikawa.kumamoto.jp